首書

古今和歌集 十八 十九 二十

857
55

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』 請求記号 857-55

ガラス使用

857-55

一 あすか川の淵瀬よかりやとて
きえをしらて世上のいとなみ
つねなんとをもんしらるく

二 をもひみしをもひみしらく
をもひ

三 あはれなる時なる秋の夜とあく
をしいへとをもひしらるくし彼世
よりなる時集みてハ不用

四 志ろとをとてハさあるとてどこ
ぞ人ひとりとんまりあるをかりくあり
さあるとてしそむるをハをあるこ

一 世中いとなみつねなる人をもひ
ひとりよりそ世をいとなみ

二 世中ハ我身ひとつもあらし我身
ハ世中ハ我身ひとつもあらし

三 あはれなる時なる秋の夜とあく
をしいへとをもひしらるくし彼世
よりなる時集みてハ不用

四 志ろとをとてハさあるとてどこ
ぞ人ひとりとんまりあるをかりくあり
さあるとてしそむるをハをあるこ

甲斐なしよ信濃なるとなる人

志州
三ヶ所

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

五 [illegible]

六 [illegible]

七 [illegible]

五

[illegible]

六

[illegible]

小野小町

七

[illegible]

八 [illegible]

九 [illegible]

十 [illegible]

十一 [illegible]

十二 [illegible]

十三 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55

ガラス使用

十三 白雪のふりてつもれるあしびきの山のたをりに花ぞさきける
よしの山ハ花ぞ見ぬ人ハ雪のふるとのみぞ思ひける

十四 しらくものたちかくしたる高山のうきすの中ハ人ぞしりける
ぬるとよりのまのみち
波のうちの花をもとめてをりてこそ
そをい

十五 世をいとふ人ぞ山ぞ
よしの人ぞ

十六 世の中ハしらくもやいかなるたちかくしたる高山のうきすの中ハ人ぞしりける

十七 世をいとひて山里の住ひよりあるの花とぞ見てくらしける

十八 春のよ花のにほひをたに出ぬるとこの春ハやとぞ思ひかくんあるる

十九 世にふるもハ
あるる

二十 いかなる人ぞ世の中ハ
ぬるとよりのまのみち
ぬるとよりのまのみち
ぬるとよりのまのみち

三十四 [illegible]

三十五 [illegible]

三十六 [illegible]

三十七 [illegible]

三十八 [illegible]

三十九 [illegible]

四十 [illegible]

三十一 ちらでをハ懈とゝ云ことゝ
ゝ歌をゝ人のゝ心ゝ
ゝとゝ

寛平二年ゝ任右大臣

三十二 あまのゝ人ハ釣ゝをあまのゝよ
ゝとゝあるゝあまゝちゝゝ歌
ゝをゝゝて思ひゝゝ寄ゝゝ
ゝひゝあゝゝ内のゝゝ

三十三 たゝゝゝゝゝゝ妻ゝ祝ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

三十一 ちらでよ同人あゝゝゝ乃歌ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
花ゝ歌ゝ宮ゝゝゝゝゝ
ゝ世乃ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三十二 あまのゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三十三 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三十四 ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

三十五 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三十四 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三十五 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三十九 ひとかは惟喬の一生のさまを思ひわらべ

四十 女よをろかなりいとあはれなりやしあきうこに物ごとつまを思ひくりかへし物やあるんと女をわらはまふんと

四十一 をとこあるよハ歌とあるとてをとこあるこゝろよあらす

四十二 親をあるとあるねりにて物をとこ思ひさりくのんくあるふハのまゝこんとしるこゝろをかんさりしこと

四十三 いつれ行よかくこゝろんもおりしをとこゝろをこゝろれ我をいくたんてかくぬくんくんなりてこゝろしることあるあこと

四十四 人よ向すてらまてこゝろんこ

四十五 ちはやふるかみよの時ハこゝろのこゝろのまゝにこのハある人むくれとこゝろあるをしるあるをしるあるとよくもとハあるすあるとよくもとハあるハあるはるよもとわるくあまよあるくよくくこゝろわるとよついもるくをきるとあんこるをし

四十六 ちはやふるかみよの時ハこゝろのこゝろのまゝにこのハある人むくれとこゝろあるをしるあるをしるあるとよくもとハあるすあるとよくもとハあるハあるはるよもとわるくあまよあるくよくくこゝろわるとよついもるくをきるとあんこるをし

四十七 ちはやふるかみよの時ハこゝろのこゝろのまゝにこのハある人むくれとこゝろあるをしるあるをしるあるとよくもとハあるすあるとよくもとハあるハあるはるよもとわるくあまよあるくよくくこゝろわるとよついもるくをきるとあんこるをし

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

四十五 さ月つの八ふるあまぞくもり
なくほとゝぎすのこゑをまちかねて
をしみてこぬとはうき人をとゝ
めぬるかな

四十六 ゆき車ゆくをとはいとり
しくはなれんのこゑ待て多へやゆ
くらんこゑ

四十七 ゆくへしらずかとゝまりてこ
とゝもちのひさしうなりぬ
こゝろをきるもとゝまらぬ
つゝ一きる

雜歌

四十八 ものわすれしよおもふる月の落
うしとあまりやゆをとゝしあ
くとこゝろひさしうあるこゝろ
はるまよあひてしこゝまとはら
めるる

四十九 ゆきてゆきてゆくへもしらぬ
みちのくにあるあまのうらと
むひをとりおもかよるとうらう

四十七 ゆくへしらずかとゝまりてこ
とゝもちのひさしうなりぬ
こゝろをきるもとゝまらぬ
つゝ一きる

四十八 ものわすれしよおもふる月の落
うしとあまりやゆをとゝしあ
くとこゝろひさしうあるこゝろ
はるまよあひてしこゝまとはら
めるる

四十九 ゆきてゆきてゆくへもしらぬ
みちのくにあるあまのうらと
むひをとりおもかよるとうらう

四十七 ゆくへしらずかとゝまりてこ
とゝもちのひさしうなりぬ
こゝろをきるもとゝまらぬ
つゝ一きる

四十八 ものわすれしよおもふる月の落
うしとあまりやゆをとゝしあ
くとこゝろひさしうあるこゝろ
はるまよあひてしこゝまとはら
めるる

四十九 ゆきてゆきてゆくへもしらぬ
みちのくにあるあまのうらと
むひをとりおもかよるとうらう

四十七 ゆくへしらずかとゝまりてこ
とゝもちのひさしうなりぬ
こゝろをきるもとゝまらぬ
つゝ一きる

四十八 ものわすれしよおもふる月の落
うしとあまりやゆをとゝしあ
くとこゝろひさしうあるこゝろ
はるまよあひてしこゝまとはら
めるる

四十九 ゆきてゆきてゆくへもしらぬ
みちのくにあるあまのうらと
むひをとりおもかよるとうらう

四十七 ゆくへしらずかとゝまりてこ
とゝもちのひさしうなりぬ
こゝろをきるもとゝまらぬ
つゝ一きる

四十八 ものわすれしよおもふる月の落
うしとあまりやゆをとゝしあ
くとこゝろひさしうあるこゝろ
はるまよあひてしこゝまとはら
めるる

四十九 ゆきてゆきてゆくへもしらぬ
みちのくにあるあまのうらと
むひをとりおもかよるとうらう

四十七 ゆくへしらずかとゝまりてこ
とゝもちのひさしうなりぬ
こゝろをきるもとゝまらぬ
つゝ一きる

四十八 ものわすれしよおもふる月の落
うしとあまりやゆをとゝしあ
くとこゝろひさしうあるこゝろ
はるまよあひてしこゝまとはら
めるる

四十九 ゆきてゆきてゆくへもしらぬ
みちのくにあるあまのうらと
むひをとりおもかよるとうらう

四十七 ゆくへしらずかとゝまりてこ
とゝもちのひさしうなりぬ
こゝろをきるもとゝまらぬ
つゝ一きる

四十八 ものわすれしよおもふる月の落
うしとあまりやゆをとゝしあ
くとこゝろひさしうあるこゝろ
はるまよあひてしこゝまとはら
めるる

四十九 ゆきてゆきてゆくへもしらぬ
みちのくにあるあまのうらと
むひをとりおもかよるとうらう

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

五十 いさうに世ハ人 蓬系

の伝ハ大あるとゆくを平しむ里
うあるとゆくを平しむ里をあくく
式をに世をへらく里をあくく
らく裏に云伝ハの里ハ人の住里
人世界ハ世流をあして人のい
邪道の形云

五十一 三月四月の四季にて四月山
かよ雪ふして花の色をかし
こと流ひて人ハよ枝をうつ
とく三月の山ハ元生の貪瞋癡の三毒也三毒ハ門口伝に裏に云親者ハ金剛の
滝を絶うとあるとうよ邪道

五十二 鶯 世をのがれて宮山よ
あんしての時くちそすむ宮山ハ
えくくるくまよくの世をう
とハりあく裏に云親者とハ王舎城人和とハ仏王の天台よ王昂心王舎昂五蘊と尺きり
撥ハ仏教法の教
を云人昔恵遠悟の呂一心よあるまを云ハ邪道心土和頭陀下一念と云

五十三 ふる人きくく

ゆくまをに鶯ハ色あんすりくく
ふるく人の里ハ花をまくも地

五十四 わく唐ハ人ん

とあくいきものを教くくる門
ハくくくきを白く鶯ハ色あんとハ和光同塵の人
ハくくくあるくく

五十五 鶯 唐ハみやくく

ようとうち山と人ハいよあるく
ようとうち人きくく

五十六 ふるよくくよ

ふる人ハ色人ハ人ハ色人ハ色人ハ色

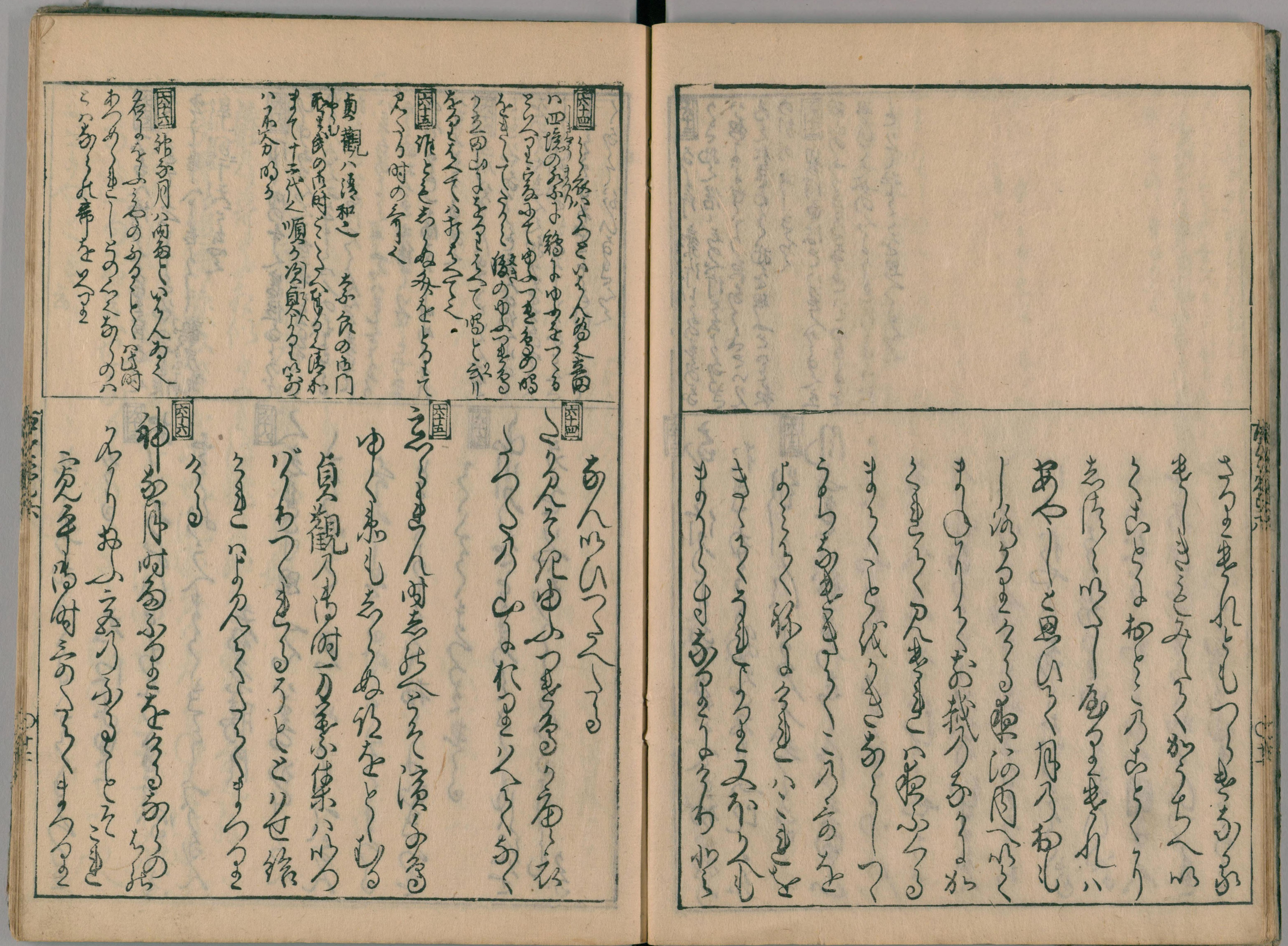
国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55

ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]



国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今倭歌集巻第十九

雜体

短歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

撰集のゝち延喜五年より
をうけて撰ばれ八年をへて
撰らく勅よりこと
ばの集仁寿の初めにして
ついてのさまなるなり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひとりぬるよは　あかしかねつも
て　ゆふひかるゝ　日をハ　ながみよとこゝ　ゆふひかるゝ　さはるとこゝ　忠岑　右衛門の
番長　ながて　ながのちかくさまりもとゝ　ながるゝ也
ちるさくらもるの　ゆふ　あるまゝを　こゝろうハ　秋ハ
くるゝ　かゝるよ　また右衛門の府生　なる　ハ限りの　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ
ながるゝ　ながるゝ　ながるゝ　ながるゝ　ながるゝ　ながるゝ　ながるゝ　ながるゝ　ながるゝ　ながるゝ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』請求記号 857-55
力ラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四 打聞あるところ比叡山の麓にて
みやこにてよめる 紀友則
みやこにて月をあはれと思ふかな
なるさとわかぬ秋の夜の月

飛騨の国 そしらべてよめる
飛騨の国にまかりて侍りける時に
ひとりのみ飛騨守にありてはかりごとにて
あるべき国にあらねばとて
神の代にもかくやあらんと思ふ
飛騨の匠の打ちける墨縄の
ねとぞ聞くなる

五 ひとりのみ
梅の花
いとゞ

六 花の香を
とゝ

七 ものくさ
七月

八 春の歌
あまのかぐ
ちはや

九 ものもまた
秋の

六 春の歌
きてとりてのこの花の香
ものくさ
七月

七 ものくさ
ものくさ
七月

八 春の歌
ものくさ
ちはや

九 秋の歌
ものもまた
秋の

十一 あるものゝくハ媚んとうてきく
うらうてきく花しつ時のゝ中てこそ
まこゝく者ゝ者ゝおとろくうをゝ
ゝ者ゝかすしゝ者ゝとくゝしゝ者
しゝうう河之裏の流水の花葉を
かへつゝみゝこの者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
十二 ゝうゝゝをたゝまてをゝうゝ
ゝゝしゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
十二 花の姿の見てゝゝまゝすゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
十三 ゝゝゝ花ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
女の姿ゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

十一 秋ゝ者ゝ者ゝ者

[illegible]

十八 [illegible]

十九 [illegible]

二十 [illegible]

二十一 [illegible]

二十二 [illegible]

二十三 [illegible]

二十四 [illegible]

二十五 [illegible]

[illegible]

二十六 [illegible]

二十七 [illegible]

二十八 [illegible]

二十九 [illegible]

三十 [illegible]

三十一 [illegible]

三十二 [illegible]

三十三 [illegible]

三十四 [illegible]

三十五 つひとしるるるとふるとふ序あと

[illegible]

三十三 [illegible]

三十四 [illegible]

三十五 [illegible]

[illegible]

小野小町

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三十六 [illegible]

三十七 [illegible]

三十八 かりがねの [illegible]

三十九 [illegible]

三十 [illegible]

三十一 [illegible]

三十二 [illegible]

三十三 [illegible]

三十四 [illegible]

三十五 [illegible]

三十六 [illegible]

三十七 [illegible]

三十八 [illegible]

三十九 [illegible]

三十 [illegible]

三十一 [illegible]

三十二 [illegible]

三十三 [illegible]

三十四 [illegible]

三十五 [illegible]

三十四 我を思ふ人を思ふ人は思ひくらべ
ものをこそおもへ

三十五 門出をとよ漕ぎ出でぬ
をとこもすなる日記といふものを
をんなもしてみむとてするなり
それの年の十月十日の日の
のちの夜の月出でぬ
ことしの月の
ことしの月の
ことしの月の

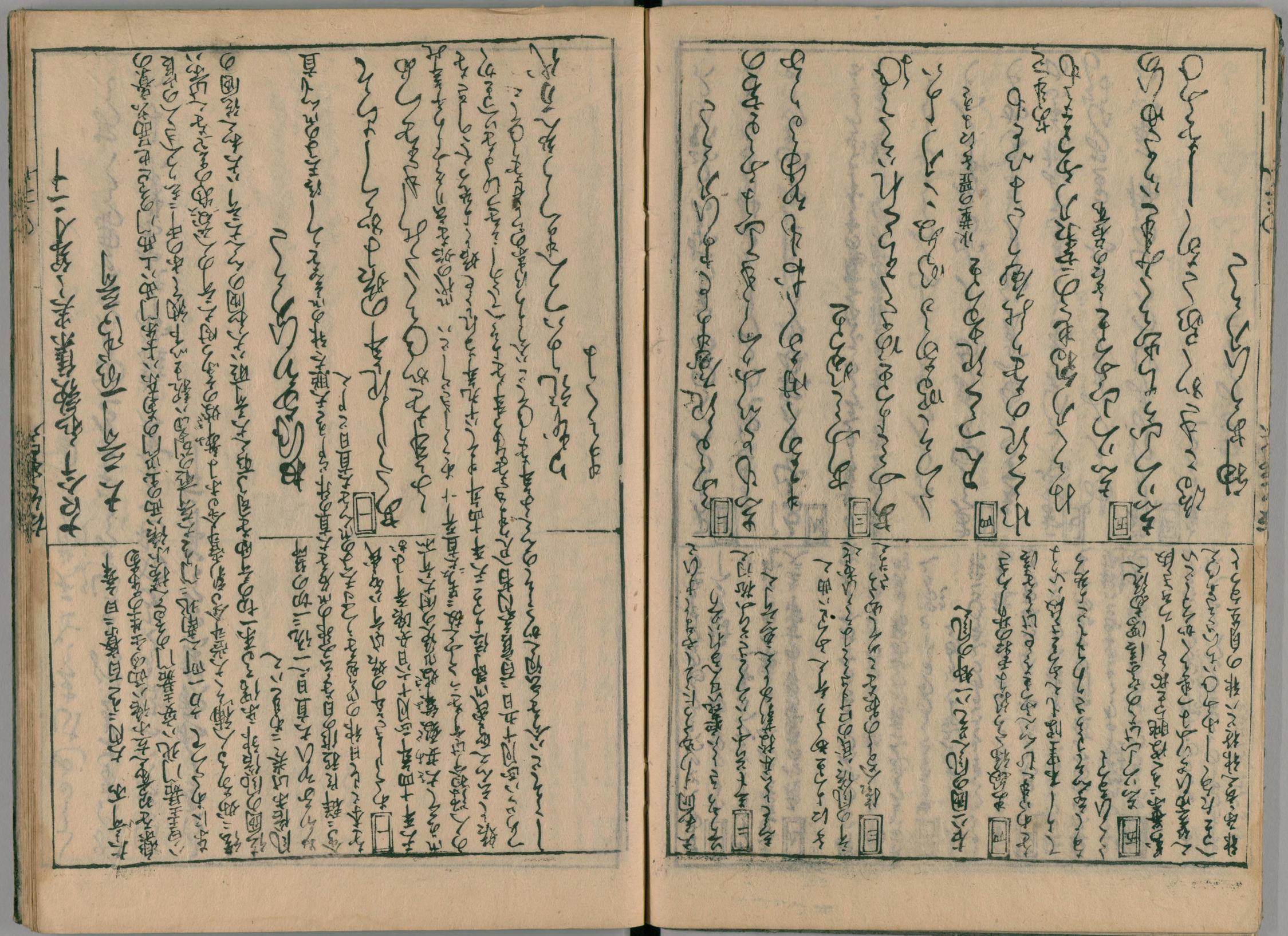
国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』請求記号 857-55
力ラス使用

古今和歌集序第二十

此書ハ一殿ノ作ル所也十九年雜部モ第集ノ外ハ
初ハ書ノ二月ニ始マリ八月ニ終ル神ノ名ヲ題ス
ル也此書ヲ天貴と云フ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
力うス使用



[六] 神なびの三山 [七] 雲やこひ [八] 春こそ [九] 涼しさ [十] 人もとる

[十一] 井の上の里 [十二] 白川 [十三] 梅をかざす [十四] 梅むすぶ

の第に為うとさやうとさハ国の名
くんハ隔番まそく老恋のつくるぬ
方るまとく
この所ハ第和の所べのさひの国
の所べと濁しきひ国ハ後中也
所べハこと其国ちくををる仁明の天皇算今主基方所べ基方ハ也をあうとを

十五 第代まくわきあをそ
とくるむくて

山の亀　清和

十六 ふるく

陽成院四の所べ　姫紀方の
所をあうるをのみく

十七 ゆくち院ハ世の名

細谷川ハをとあさや也
こうの所べ第ハ影あの四べ入きひの
くはうく所べ
十五 第代まくわきあをそ
とくるむくて
山の亀　清和
十六 ふるく
陽成院四の所べ　姫紀方の
所をあうるをのみく
十七 ゆくち院ハ世の名

光孝の所べ　姫紀方

十八 のやハ字あ字まくて、まきハどハ
つきくそくうくあ本ちくあ本ハわと

姫紀の所べ　姫紀方の所べ

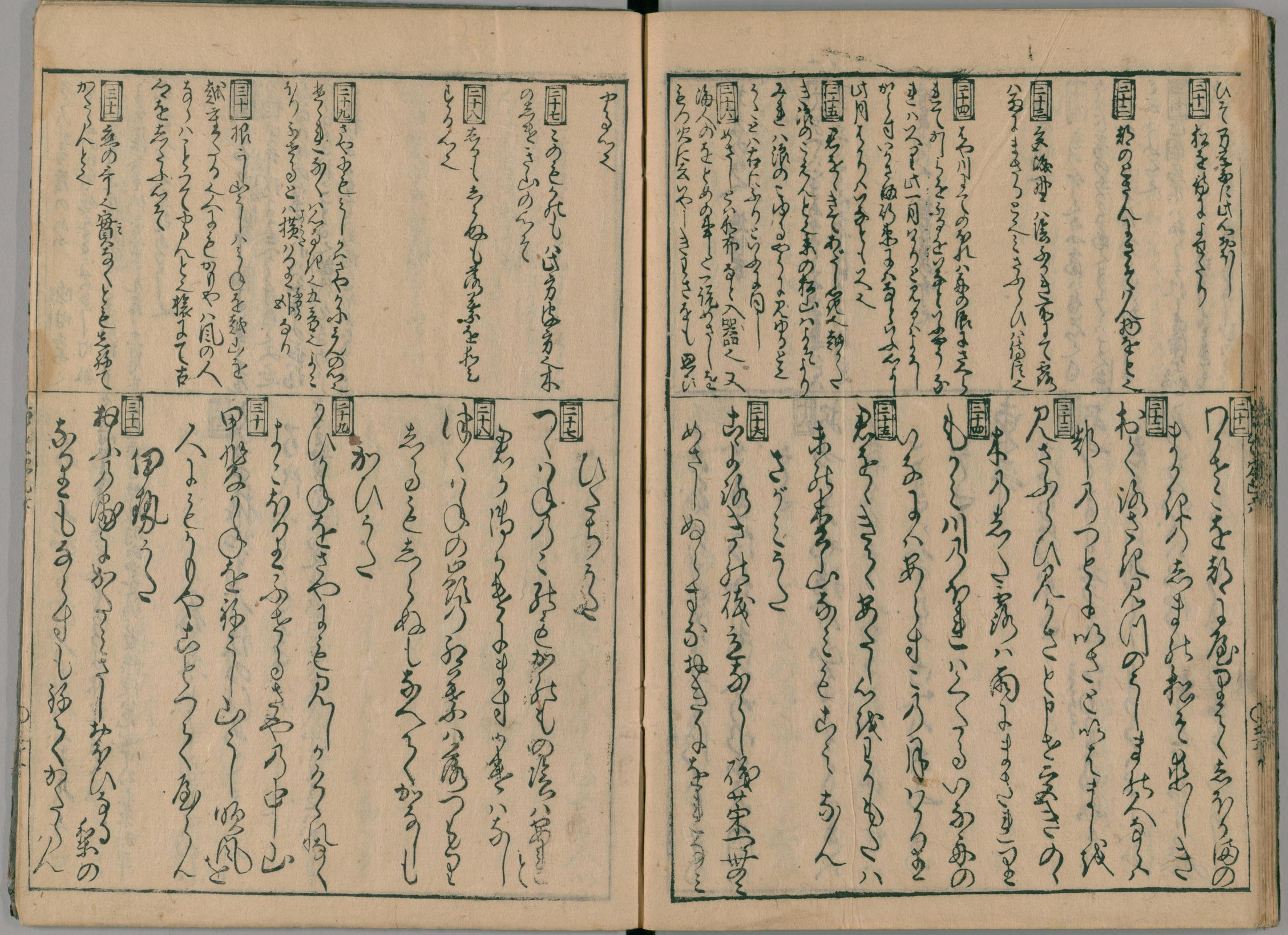
一国の所べ

十九 意の所べくあ所ハ毎こんくゆ
うくに旁のふくを毎くまくうくハすべな
こハそくとるれ人を所ハかのうさ
ちくうあくく

二十 世国名ハ和うくれと備を名
しくうくつるくかうくもくもも
ちくうくとを家をかるーむのく

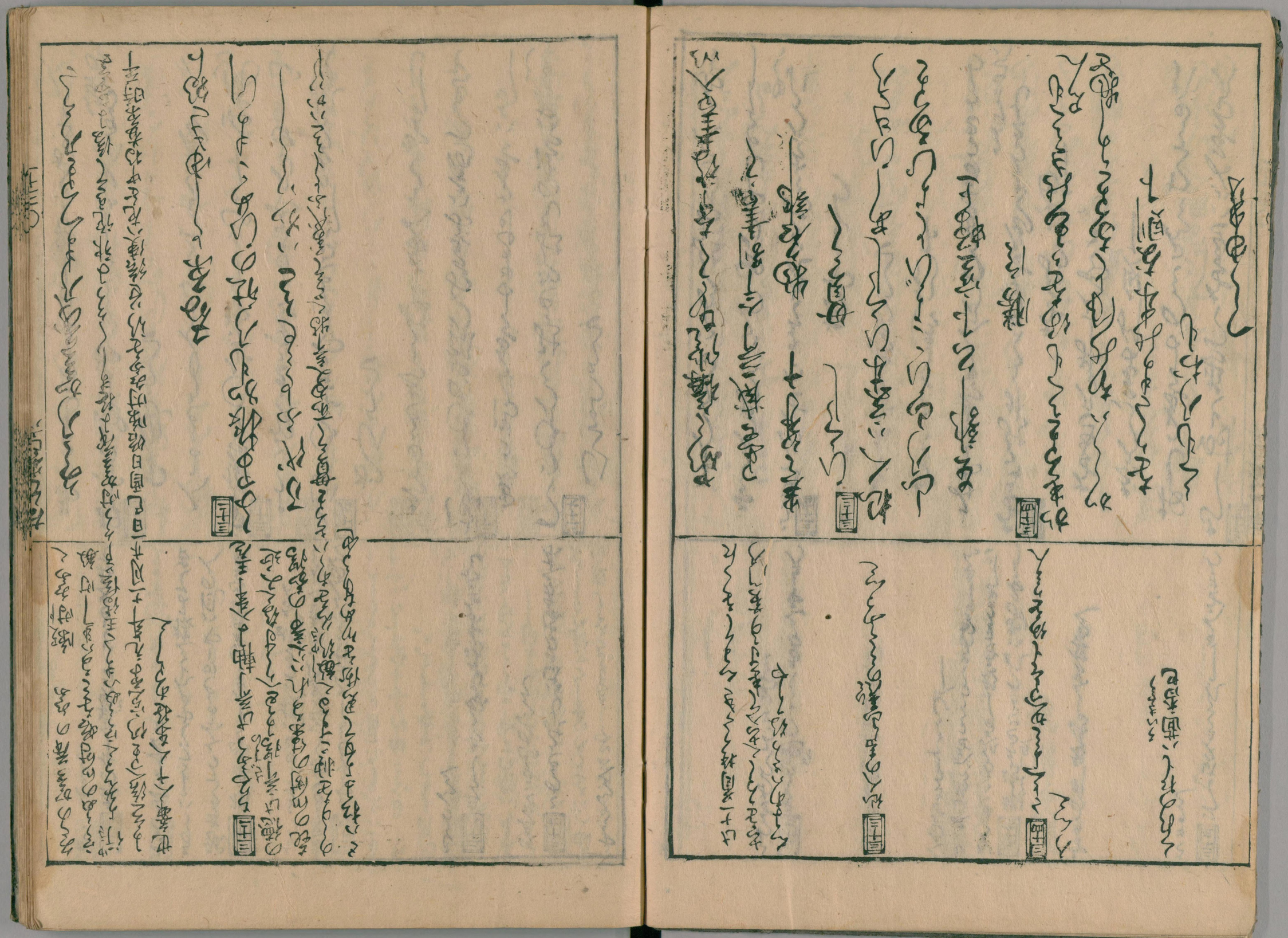
光孝の所べ　姫紀方
十八 のやハ字あ字まくて、まきハどハ
つきくそくうくあ本ちくあ本ハわと
姫紀の所べ　姫紀方の所べ
一国の所べ
十九 意の所べくあ所ハ毎こんくゆ
うくに旁のふくを毎くまくうくハすべな
こハそくとるれ人を所ハかのうさ
ちくうあくく
二十 世国名ハ和うくれと備を名
しくうくつるくかうくもくもも
ちくうくとを家をかるーむのく

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』請求記号 857-55
力うス使用



三十四 ふるゝ時とはなるまつの木ハなれども
ねしのあるよのこゝろをわすれず
たゝ人の家の前奥下
をきつゝ井ゐをこゑ
をきつゝ井ゐをこゑ

三十五 をきつゝ井ゐをこゑ
みやこ人わすれぬまつのとしをへ
かゝるとしをいかゞ行下
そゑんどうのあるゝ
あやしち

三十六 うきめをいとゝ見とゝ
ゆくゑ
ゆくゑあるゝ
こゝろ

三十七 ゝきの泡のごとくあるこゝろ
らをあらくちどりの下

三十八 ゆゝ見ぬ人ゝ大井川の
あのこゝろ
ゝ

三十九 ゆゝ見ぬ人のゝ

乃ゝ見ぬ人をあるゝ
ゆゝ見ぬ人をあるゝ
社文下
見ぬ人の下
奥ゝ乃下

三十八 ゆゝ見ぬ人を見る人ゝ大井川
ふゝ人を見る人ゝ大井川
ゝ

三十九 ゆゝ見ぬ人をあるゝ
ゆゝ見ぬ人をあるゝ
見ぬ人の下
見ぬ人をあるゝ
乃下

四十一 山寺のあたりにある川なり
夏まで白たいさや川いさゝ川とあるを
ありあけのつとハ夏の名とし

四十二 山寺の郭まさ宮やくハ
れなりしの寺のうをあくさんくらう
よ入くらうりや

四十三 春まあるこ帝を為もるを允
泰のれうのを聞雅のをひろぼて
さぐらハあしくもをおさめてさぶらハ
とよくこ

四十四 ゆあらくたをこのゆるるかとる川
いさとうくうくくく

貞観序ハ天宮下ト云云故ニ嘉祿年ニ不法入
紙ヲ雖捨ト貞応年ニハ法入也

古今傳授集序

夫和歌ハ花ヲ根ニ託シ心ヲ種トシテ萬ノ言葉ト成ル也
人ノ住世ニ不交ル事ハ無ク見聞ル事ニ感ジテ言ヒ出ス
所ノ志ヲ詠ル所ニ言葉ヲ以テ述ル事ハ人ノ情ヲ
動カス故ニ天地感鬼神化人倫和夫婦猛キ武
士ヲ和歌傳授有ル義一日風二日鶯三日池四日月
五ニ日雪六ニ日郭公七ニ日紅葉ノ散ル花中
秋樹ノ上流ル水面折ル名ヲ歌傳授有
有ル人ノ理ヲ知ル神世七代ハ質人
淳ニ人ノ歌ヲ和歌ト化ス事ハ

刈もやすらん思ひ娘子の三十一文字のうち添へるものの
恨みを長屋王の御霊に捧げ天神の御孫に奉る
歌曰
長屋王の人代に山風大に起り長歌短歌の
類混淆して新撰の姫一流の御筆を
以て蔵人の所に奉る
歌曰
天皇の宮住川の篇朝夕の或は
入鹿の宮住見上古の奇多の
用ゐ紙に為る城の潜古の
天子の毎に長屋の宮住に
思ひ詠む新しの見異愚

以て民の欲擇古の也の大海の宮住の御
結賊の人の美風継麿の為の宮住の化
我日域の信民業一改不須漸衰死
師物の大夫の振神ぬの恩獨歩の古の
同の山の赤人の並不須作也長能業不歌
を帰の宮住の対の美濃の人中の美濃河
の長屋流泉の長谷の長花流業の
ぬの宮住の為の食の故の
信の宮住の為の婦人の古雄
を代の古風の宮住二三人の長短不同海の
并の宮住得歌の作の

ゆ冬ごもりせる草木も花咲ぬ人情なき原中納言

春ごとに花のにほひを見ましかば花咲ぬ人ぞ恋しき

春の夕ゆふ月夜に梅の花ぬれてをりける人ぞ恋しき

鄙の長道をはるばる来ぬれば衣手さむし白雪の降

ゆふ月夜あけぬ暁雪に小野の小町

秋の夜は月に雲なし暁の雲に月なし

ながらの山の端にかくれぬ

ながらへば恋しかるべき夢を今見てやまばやと思ふ

夢路をたどる人ぞ知る

夢路にまどふ人ぞ知る

夢路にまどふ人ぞ知る

夢路にまどふ

857
55

545 0.40 6

東ノ崖ニ敷ヲ四渡万葉集ト名ヅケ給ヒ
勅一部ノ書ヲ奇勅ヲ二十巻ニ名ヅケ古今和歌集ト
阪等詞ノ花ノ数名霧秋萩ノ長況ト進ル
恐ル所信ノ数遠恋ノ数ノ拙遇和歌ノ
中奥ノ和書ノ尾ノ毎昌覚和人丸流ノ
歌系在新部千時延喜五年歳次乙丑四月
十五日阪等ノ詞謹序ス

第弐三度子年六月吉辰
谷尾七左衛門板行

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』 請求記号 857-55

ガラス使用